インターネット上の知り合いに抱く友人像

Friend image in the Internet

ネットワーク情報学部　渡辺未緒，山下清美
School of Network and Information　Mio WATANABE, Kiyomi YAMASHITA

Keywords: friendship, interpersonal relationship, impression change

1．　背景と目的

SNSやブログなどを用いて、遠く離れた所に住む、会ったことのない人とも手軽に交流できるようになった。その結果、インターネット上で多くの知り合いを作ることが可能になった。しかし、大変親しくなったインターネットで出来た知り合い（以下、ネット友人）と、実際に学校などで会って対面で話をしている友人（以下、リアル友人）は、必ずしも同じタイプの友人ではないと考えられる。

また現代の大学生は友人関係に無関心だと中園・野島（2003）は指摘しているが、それならば自ら進んでネット友人を作る必要はない。そもそもネット友人がいる人といない人とでは、友人というものに求めるものが異なるのであろうか。また、ネット友人がいる人の場合、その人にとって、ネット友人とリアル友人に求めるものは異なるのだろうか、同じなのだろうか。

さらに、ネット友人がいる場合でも、そのネット友人と実際に会う人と会わない人がいる。会うと印象は変化するのか、会う前と会った後で、印象にギャップが生じるのか、生じるとすればどのようなギャップなのか。インターネットが普及し始めた頃は、出会い系サイトで知り合って事件に巻き込まれるということがあり、ネット友人と実際に会うという行為は、危険なこととととらえるのが一般的だった。だが、最近はインターネットが通常のコミュニケーション手段のひとつとなり、ネットで知り合って友人や親しい関係になることはめずらしいことではなくなった。オンラインゲームがきっかけで交際を始めた男女が実際に結婚したという報道などもよく目にする。このように、ネット友人とより親密な関係を築いていくためには、会うという行為は重要だと考えられる。

研究1では、SNSの代表であるmixiの利用者に対して、ネット上での人間関係や、関連する行動を調査する。

研究2では、SNSに限定せず一般にインターネット上で実際にネット友人がいる人、あるいはネット友人に会ったことがある人と、ネット友人がいない人とを比較して、理想としている友人像の違いや、それぞれの友人に求めるものを探る。

以上の2つの調査を合わせて、本研究では、リアル友人とネット友人の違いを明確にしていくことを目的とする。

2．　研究1

2.1. 目的

大学生・専門学校生のmixi利用者における利用状況と、マイミクに含まれる人間関係の種類や関連する行動を明らかにする。

2.2. 方法

調査手段

インターネット上でのアンケート調査を6月末から約1ヶ月間実施した。

調査対象・回答者数

大学生と専門学校生。大学やネット上での知り合いを通して口コミで協力を依頼した。回答者は全105名で、そのうち分析対象となるmixi利用者は90名。

調査内容

前半はログイン頻度や利用目的というmixiの利用法など基本情報を聞き、後半は実際にmixiで繋がっているマイミクとの関係や関連する行動について聞いた。全29問。

2.3. 結果

mixiの利用状況

mixiの使用法にどのようなものがあるのか実態調査を行った。所有しているアカウント数について聞いてみたところ、90名中71名が1アカウント（78.8%）、18名が2アカウント（20%）、1人が3アカウント（1%）と回答した。mixiは1人1アカウント制であるが、実態は多少違っている。以降の質問では、アカウントを多く持っている回答者については、一番良く使うアカウントで回答してもらっている。ログイン頻度については「1日に何度も」が45名(50%)、「1日数回」が25名(27.7%)、「1日1回」が10名(11.1%)、「3日に1回」が6名(6.6%)、「それ以下」が4名（4.4%）となり、回答者の多くはア

クティブユーザーである。mixiの利用目的としては、「日記を読む」が一番多く、それ以降は「日記を書く」「コメントをする」「足跡を確認する」などが続く。

mixi内での人間関係

mixiに招待してくれた人物を聞いたところ、「親族」4名（4.4%）、「学科友人」40名（44.4%）、「地元友人」19名（21.1%）、「サークル仲間」6名（6.6%）、「インターネット上で知り合い、直接会った事のある友人(以下、オン友1)」12名（13.3%）、「インターネット上で知り合い、直接会った事のない友人（以下、オン友2)」5名（5.5%）、「その他」4名（4.4%）となった（図1)。「親族」「学科友人」「地元友人」「サークル仲間」「バイト仲間」をリアル友人、「オン友1」「オン友2」をネット友人とカテゴライズして、これ以降の分析を行う。

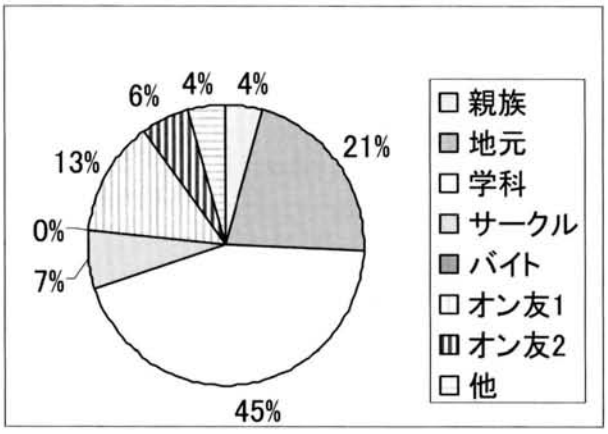

図1　mixiに招待してくれた人との関係

初めにマイミクの人数が一番多い人間関係を聞いた。リアル友人に招待された人で、リアル友人と答えた人が69名中60名（86.9%)、ネット友人と答えた人が9名（13%）いた。一方、ネット友人に招待された人で、リアル友人と答えた人が21名中6名（28.5%)、ネット友人と答えた人が15名（71.4%）いた（図2)。これから、招待された関係と同じ関係の人物が多くマイミクにいることになる。

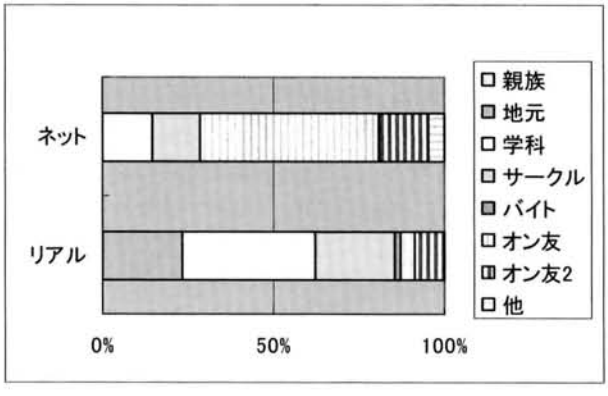

図2　一番多いマイミクとの関係

次にmixiで一番多くコメントをしに行くマイミクとの関係を聞いた。リアル友人に招待された人は、リアル友人にコメントする人が69名中56名（81.1%)、ネット友人にコメントする人が13名（18.8%）であった。反対にネット友人に招待された人は、リアル友人にコメントする人が21名中9名（42.8%）で、ネット友人にコメントする人が12名（57.1%）であった（図3)。このことから、リアル友人に招待された人はリアル友人にコメントを多くしており、ネット友人に招待された人はネット友人に多くコメントをしていると言える。

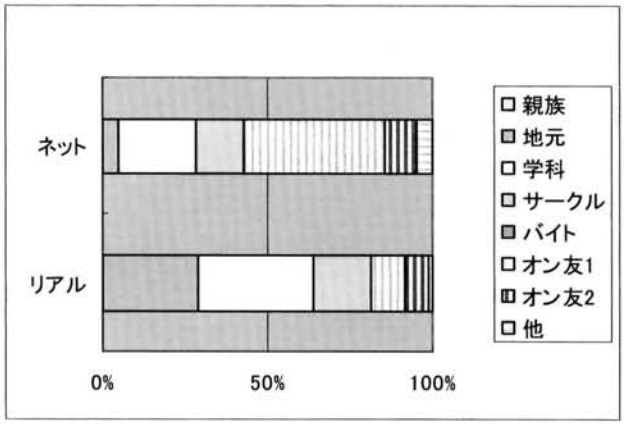

図3　一番コメントをしに行くマイミクとの関係

また、ネット友人をオン友1とオン友2と分けてみたところ、オン友1にもっとも多くコメントすると答えた人が42.8%、オン友2にもっとも多くコメントすると答えた人が9%だった。この結果から、同じネット友人にコメントをするとしても、オン友1（直接会ったことのあるネット友人）にする割合が高いと考えられる。

加えて、マイミクを削除した事があると答えた23名（リアル友人に招待された人16名・ネット友人に招待された人7名）に、削除した人とどのような関係だったのかを聞いた。その結果、リアル友人に招待された人がリアル友人を削除したのが47.6%、ネット友人を削除したのが52.3%である。対してネット友人に招待された人がリアル友人を削除したのが62.5%、ネット友人を削除したのが37.5%である（図4)。

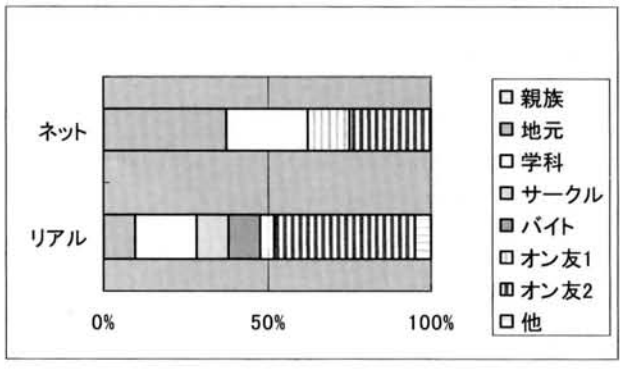

図4　マイミク削除の内訳

結果より、招待してくれた人とは逆の関係にある人物を削除している人が多いと言える。マイミクを削除するということは、その人との繋がりを削除する事に当たる。mixi 内では逆の関係は切りやすいと言うことだ。

3.　研究２

3.1. 目的

研究１の結果から、ネット上の強いつながりが、ネット友人がいる人といない人とでは異なる可能性があることや、ネット友人と直接会うことで関係が深まることが示唆された。そこで研究２では、ネット上で出会った知り合いと直接会う事によって、友人関係に変化が起こるのか、そもそもどのような人がネット上に友人を求めており、会うまでに至るのかを明らかにすることにした。主に次の点について検討する。

１．ネット友人と直接会うことで、会う前と印象が変化するのか、また事前に知っていた情報のタイプによって、変化の仕方に違いがあるか。

２．ネット友人がいる人、またネット友人と会ったことがある人は、リアル友人しかいない人に比べて、友人観が異なるか。

３．ネット友人がいる人といない人では、孤独感や社会的スキルに違いがあるか。

3.2. 方法

調査手段

調査用紙を２回に分けて配布して行った。

調査対象・回答者数

専修大学ネットワーク情報学部生。回答者は大学生196名で、そのうち有効回答は169名（男104、女65）であった。

調査内容

インターネットでの知り合いの有無や、印象変化に関する質問の他に、友人観（丹野,2006）、孤独感（諸井,1985,1987）、社会的スキル（菊池,1988）を測定した。丹野（2006）が開発した友人関係尺度は９因子から構成されるが、リアル友人だけでなくネット友人についても不自然とならない項目をそれぞれの因子につき２項目ずつ抜き出し、表現を簡略化して用いた。分析では各因子２項目の評定値の合計を用いた。孤独感と社会的スキルについてはオリジナルの尺度をそのまま用いた。全 26 問。

3.3. 結果

有効回答169名中、ネット上に知り会いがいる人は67名（39.6%）おり、その内実際に会ったことがある人は38名（22.4%）いた（図 5）。ネット上に知り会いがいる人だけで見れば 56.7%が実際に会っていることになる。出会ってから会うまでの期間は一ヶ月以内が 20%、半年以内が 30%、一年以内が 30%、三年以内は 15%、それ以上が 5%となっており、ほとんどの人が出会ってから１年以内に会っているということになる。なお、出会った場としては SNS が 21.2%、掲示板が 17.3%、チャットが 21.2%、ブログ 5.8%、オンラインゲーム 21.2%、その他（自分のサイトなど）13.5%という割合になっている。

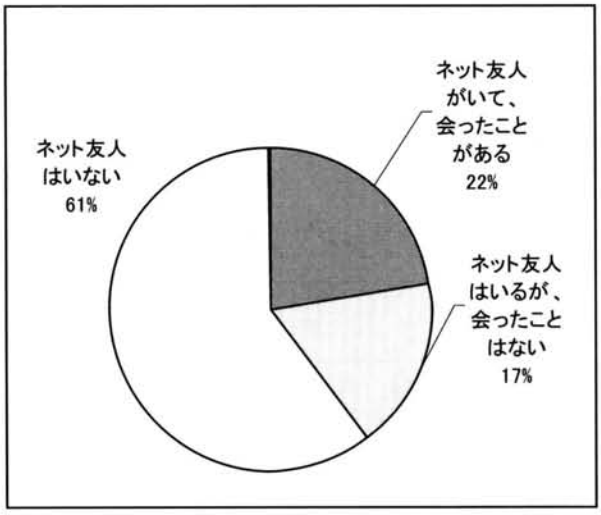

図５　ネット友人の有無

ネット友人と会うことによる印象変化

ネット上の友人と会ったことによる印象変化については「あった」と答えた人が 27.2%で、この内、今もネット上で関係を継続していると答えた人は 77.7%だった。一方、印象変化がなかったと答えた人については、ネット上で関係を継続していないと答えた人の方が多く 58.8%いた。実際に会うことで新たな印象が得られると、その後も関係が継続するのだろう。なお、関係継続についてはネット上で出会った場所によって違いが出る。出会いが SNS である人は 85.7%の人が継続しているが、出会いがオンラインゲームの人は 20%の人が関係を継続している。両者ともネット友人とのコミュニケーションに用いるツールや交流期間、交流頻度も変わらない。だがオンラインゲームは一過性が高く、ゲームをプレイしている時は仲良くしていても止めてしまえば疎遠になってしまうのだろう。

また、事前にネット上で得ていた情報によって、印象変化の起こりやすさに違いがあるかを検討した。属性情報や日記のみから情報を得ている人と会って印象が変化した人が 66.6%いたのに対し、創作的なものから情報を得ている人と会って印象が変化した人は 22.2%であった。属性情報や日常雑記的な日記では、人物の表層的な部分しか伝わらないが、創作的な表現は、その人の内面が伝わるため、直接会ったときのギャップが少ないのかもしれない。

ネット友人に求める友人観

ネット上に友人がいて会ったことがある場合、ネット上に友人がいて会ったことがない場合、ネット上に友人がいない（リアル友人のみいる）場合に分けて、それぞれが友人関係に何を求めているか、つまり友人観の違いを調べた。

リアルでの友人との関係の強さについては、ネット上に友人がいる人といない人との比較、ネット上の友人と会ったことがある人とない人との比較のいずれでも、差は見られなかった。つまり、ネット上での人間関係が違っても、リアルな友人に求めるものはほとんど同じであると言える。

表 1　会ったことがあるネット上の友人と、会ったことがないネット上の友人に求める友人関係の（平均値と不偏標準偏差）

友人関係の因子	会ったことがある	会ったことがない	*t*値と有意水準
安心・気楽さ	7.421 (1.968)	5.793 (1.567)	3.656 p<.001
娯楽性	7.763 (1.937)	6.690 (2.037)	2.198 p<.05
関係継続展望	6.211 (2.002)	4.069 (1.963)	4.375 p<.001
情緒的結びつき	5.947 (1.944)	4.103 (1.970)	3.824 p<.001
相談・自己開示	6.395 (1.953)	5.793 2.024)	1.230 n.s.
支援性	6.132 (2.220)	4.897 (1.739)	2.471 p<.05
肯定・受容	7.105 (1.673)	5.931 (1.963)	2.640 p<.05
学習・自己向上	7.289 (1.520)	5.828 (2.027)	3.373 p<.01
人生の重要な意味	6.237 (1.979)	4.276 (2.120)	3.897 p<.001

次に、ネット上の友人との関係の強さについて、ネット上に友人がいて会ったことがある群と、ネット上に友人はいるが会ったことがない群とで比較したところ、求める友人観の強さに明確な違いが見られた。表1は、9因子ごとの各群の平均値と不偏標準偏差、および群間の平均値の差の検定を行ったときの有意確率である。1因子（相談・自己開示）を除き、すべての因子において有意差が見られ、娯楽性、支援性、肯定・受容の3つは5％水準、それ以外は1％あるいは 0.1%水準という明確な差が認められた。ネット上の友人に会ったことのある人の方が、会ったことのない（あえて会おうとしない）人に比べて、あらゆるタイプの友人を強く求めていることを示していると言える。

また、それぞれの群で、どのようなタイプの友人を重視しているかについても、若干違いが見られた。ネット上の友人と会ったことがある人が、求める友人関係の上位3項目は、娯楽性、安心・気楽さ、学習・自己向上であるのに対し、会ったことがない人は、娯楽性、肯定・受容、学習・自己向上であった。会う、会わないに限らず、ネット上の友人に対して娯楽性や学習・自己向上が求められる点は共通しているが、会う人は安心・気楽さを求めるのに対し、会わない人は肯定・受容を求める。こうした求めるものの順位の違いより、ネット上の友人と会うかどうかは、求める友人像の違いに関係するのではないかと考えられる。

孤独感、社会的スキル

孤独感と社会的スキルについては、男性と女性とでことなる結果が得られた。

ネット上に友人がいて会ったことがある男性の孤独感（平均値 46.25）は、ネット上に友人はいるが会ったことのない男性（38.94）より有意に高かった（*t*=2.438, p<.05、図 6）。

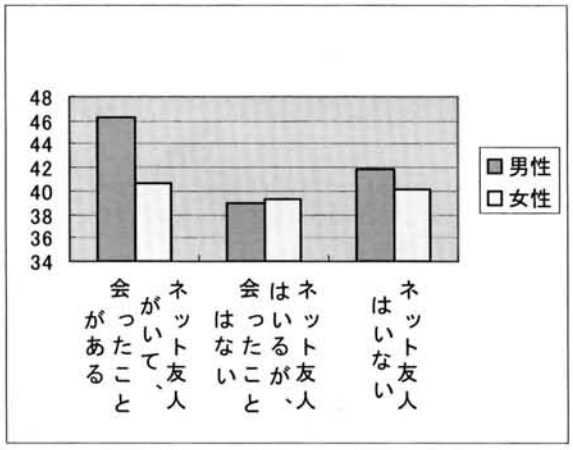

図 6　孤独感の平均値

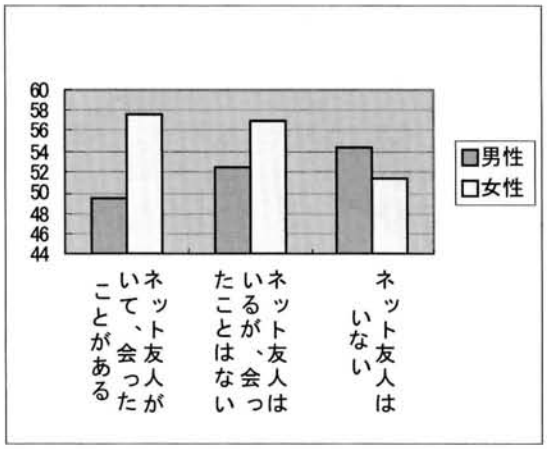

図 7　社会的スキルの平均値

社会的スキルについては、ネット上に友人のいる女性（平均値 57.46）の方が、リアルにしか友人がいない女性（51.38）より社会的スキルが有意に高かった（t=2.04, p<.05、図 7）。また、ネット友人がいて会った事のある男女の社会的スキルの平均値を比べたところ、女性（57.68）が男性（49.38）より有意に高かった（t=2.44, p<.05）。

以上の結果から、ネットワーク上の友人に会うのは、男性では社会的スキルが低く、孤独感が高い人だが、女性では社会的スキルが高い人である、と言える。

4. 考察

今回ネット上での友人関係を調べたのは、第一著者がネット上に友人がいて、その友人について良い感情を持っていることが関係している。著者がインターネットを始めた頃は出会い系サイトによる犯罪が横行しており、ネット上で知り合った人と直接に会うということに対して嫌悪感を抱いていた。しかしその後インターネットに慣れてから mixi で出会った人たちと会うようになり、最初は不安も多くあったが、会って話をするとネット上でやり取りをする以上の魅力を発見できることが多かった。その人たちとは 2 年以上経った今も交流は続いている。このような経験から、ネット上で知り合った人と会うことについて、危険性だけを強調するのではなく、新しい友人と出会う重要な手段になっていると考えるようになった。ネットワークは友人を作る一つの場なのである。今回の調査結果からも、ネット上の知り合いと会うことについて、多くの人が良い感情を持つようになっていることがわかった。以前とは、インターネットに対する接し方や距離感が違ってきていると思われる。

その一方で、今回の調査で、予想と異なる結果も得られた。ネット上に友人を多く作るのは、リアルでの友人関係が寂しいからではないかと考えていたのだが、これは性別によって異なるようだ。男性は確かにネット友人に会った事のある人たちの孤独感が有意に高い。しかし女性については、ネット友人の有無やネット友人と会ったかどうかは、孤独感と特に関係はなかった。さらに社会的スキルに関しても性差が明確に見られた。男性の場合、ネット友人がいない人の方が、ネット友人がいる人に比べて社会的スキルが高い。一方女性の場合、ネット友人がいない人、いるが会った事のない人、いて会った事のある人の順に社会的スキルが高くなっている。女性に関して言えば、リアルな生活に不満はなくても、さらに積極的にネットに友人を求めている、ということだと考えられる。リアルでは人間関係の広がりに限度があるので、ネットという世界に進出し、様々な人と話をし、自分の満足する友人を見つけようとしている。彼女たちにとって、リアル友人に対する友人観とネット友人に対する友人観には大きな差異がなかったため、意識をして友人の種類を分けているということはない。また、両者に関係なく娯楽性を求めていることから、一緒にいて楽しめる人物＝友人と考えている傾向が強いように感じられた。

なぜネット友人と会うかについては、性差もあり、明確には分からなかった。しかし友人関係尺度の結果から、ネットに居場所を求めている人は、あえて会わないのではないかと考えている。ネット友人に会わない人たちが 2 番目に高く評価した「肯定・受容」という項目は、自分の存在を認めてくれる、自分に居場所を作ってくれる、という質問項目である。こうした人々は、ネットでよい関係を築いた友人と直接会うことによりギャップが発生し、友人に好意を持たれなくなるのではないかという不安を感じている可能性が考えられる。

本研究の最初に挙げた、ネットで知り合った友人は、リアルでの友人と異なるのか、という疑問については、まだまだ明らかにできていないことが多い。そもそも友人とは何か、という根本的な問いは、いつまでも解決しない課題として残っているように思われる。

しかし少なくとも、ネット上で知り合った人と会うことにより、新しい発見があるからこそ、そこに継続した人間関係が築かれるのではないか、ということは示唆された。このことから、友人という観点からも、ネットとリアルという区分が意味をなさなくなる時代が近づいているのではないか、と考えている。

参考文献

菊池章夫 1988 思いやりを科学する　川島書店
諸井克英 1985 高校生における孤独感と自己意識　心理学研究，56，237-240.
諸井克英 1987 大学生における孤独感と自己意識　実験社会心理学研究，26，151-161.
長沼恭子・落合良行 1998 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の人間関係 青年心理学研究 10,35-47
中園尚武・野島和彦 2003 現代大学生における友人関係への態度に関する研究-友人関係に対する「無関心」に注目して-　九州大学心理学研究 4,325-334
岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究　43,354-363
斎藤和志・中村雅彦 1987 対人的志向性尺度作成の試み 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科） 34,97-109
丹野宏昭 2006 大学生の内的適応に果たす友人関係機能　日本社会心理学会第 47 回大会発表論文，132-133. および配布資料
丹野宏昭・松井豊 2006 大学生における友人関係機能の探索的検討　筑波大学心理学研究 32,21-30